碇シンジはいかに大人になれるか～エヴァンゲリオン「意志」と「贖罪」の物語～

法学部政治学科　31950900　石野凌

2021 年 3 月 8 日、四半世紀にわたる物語が終焉を迎えた。エヴァンゲリオンの完結作『シン・エヴァンゲリオン劇場版：||』の公開である。コロナ禍の影響もあり、延期した今作であったが興行収入は 102.8 億円という大ヒットを記録した。新劇場版シリーズの総監督である庵野秀明監督は 2015 年に『シン・ゴジラ』、そして 2022 年には『シン・ウルトラマン』にも携わり、2023 年には『シン・仮面ライダー』も控えるなど、アニメ以外の実写映画において大いに活躍が期待される映画監督である。

さて今回の論文ではこのエヴァンゲリオンについて主人公碇シンジの描写を焦点に分析していきたいと考えている。TV アニメ版&旧劇場版(以降旧及び旧シリーズと呼称)と新劇場版 4 作(序・破・Q・シン、以降新劇及び新劇場版シリーズと呼称)の比較を踏まえつつ、とくに主人公碇シンジの心理描写について複数の角度から考察を加えることで、旧劇のエヴァンゲリオンからリメイクされた新劇場版とは何だったのかを改めて考えてたい。論文に入る前に、先行研究の整理と論文の分析方法について補足する。

エヴァンゲリオンは、様々な角度で研究や考察が行われてきた。社会情勢、キリスト教や精神分析、過去の作品群からの出典、「オタク批判」など様々な文脈で存在している。この論文では「セリフ・演出・映像ショット分析」から捉え、そこに付随する形で他の文献も参考に、「碇シンジの心情」についての分析を務めたい。

具体的な方法としてはまずストーリーに沿って旧シリーズと新劇場版シリーズを、シナリオ(セリフ)・絵コンテ・映像といった資料ベースで比較する。演出意図、それによって表現された演出効果を確認することで主人公碇シンジの特徴や変化などを探り、「エヴァンゲリオン」という物語全体を考察していくのが本論の目的である。

論文に入る前に新劇場版シリーズを作るにあたっての庵野秀明監督の所信表明文の抜粋を掲載する

「エヴァ」はくり返しの物語です。
主人公が何度も同じ目に遭いながら、ひたすら立ち上がっていく話です。
わずかでも前に進もうとする、意思の話です。
曖昧な孤独に耐え他者に触れるのが怖くても一緒にいたいと思う、覚悟の話です。
同じ物語からまた違うカタチへ変化していく 4 つの作品を、楽しんでいただければ幸いです。[1]

---

[1] 劇場用ポスター/チラシ　参照「みんなのエヴァファン」https://eva-fan.com/blog-entry-26.html

Ⅰテレビアニメ版とエヴァンゲリオン新劇場版：序の比較
～“二人”の碇シンジと「意志」の有無～

新劇場版「序」(2007)(以降「序」)はテレビアニメ版第壱話～第六話(1995)をなぞったものだ[2]とよく言われている。実際、新劇場版はエヴァンゲリオンのリメイクであり、画コンテも大部分旧シリーズを流用している。一方で「序」は95年当時とは違うデジタルの再撮影と3DCGの運用や色調[3]など10年を経て進歩したアニメの技術革新を反映したものであり、かつ劇場用映画として公開されたため捨象された描写や分かりやすくした描写がなされているなど2007年のエヴァとして再構成されている。しかし、キャラ描写、特に主人公碇シンジの性格は、リメイクによる差異とは済まされないほど根本的に異なっていることが分かる。

① セリフ分析1　　ミサトとシンジ　車内での会話

このシーンはミサトとシンジが初対面した直後、NERV と呼ばれる施設に向かっている場面だ。このシーンはミサトとシンジの性格が垣間見れるほとんど最初のシーンといえる。

●テレビアニメ版第壱話

シンジ「いいんですか？こんなことして」
ミサト「あ～はぁ～いいの。今は非常時だし、車動かなきゃどうしようもないでしょ」
～一部略～
シンジ「説得力に欠ける言い訳ですね」
ミサト「つまんないの、カワイイ顔して意外と落ち着いているのね」
シンジ「ん、そうですか」
ミサト「あれ？怒った？ごめんごめん、男の子だものね」
シンジ「ミサトさんこそ歳の割に子供っぽいんですね」

●「序」

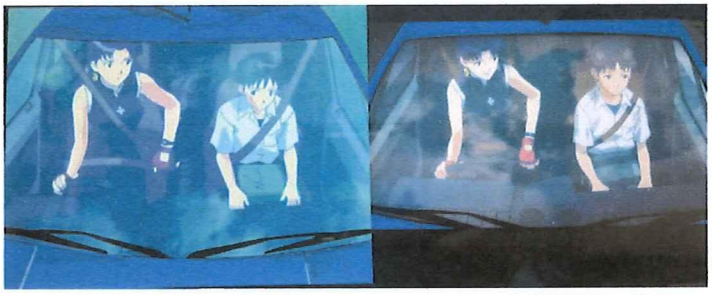
ミサト「ってなにも聞かないのね、シンジ君」
シンジ「え、はい」
ミサト「さっきから私ばっか話してんだけど」
シンジ「ん、すいません」
ミサト「謝ることはないけど」
～一部略～
シンジ「いや、あの聞いても何も答えてくれないだろうと思って」
ミサト「妙に気を回して決めつけんのね。子供らしくないわよ」

---

[2]「エヴァンゲリオンの精神史」P.322
[3]「シン・エヴァンゲリオン論」P.140

シンジ「ん、いいんです。先生に言われた通りにしてるだけですから」

ミサトの変化にも目がいくが、今回はシンジに注目する。このシーンは新・旧どちらにおいてもストーリーの開始地点であり、観客に対して二人の第一印象を示すシーンだが、はっきり違いが出ている。旧シリーズでは、シンジはミサトに「落ち着いている」と言われ、大人びたという評価はあるが、シンジは積極的にミサトに話しかけ、初対面の年上の相手に「歳の割に子供っぽい」とまで言い放つ、年相応の少年らしさ、無邪気さを見せている。一方「序」でシンジはミサトに積極的に話しかけることはなく、ミサトに「何も聞かない」と指摘され「妙に気を回して決めつけんのね」と言われている。14 歳とは思えない諦観のような雰囲気を醸す少年になっている。つまり旧シリーズでは「積極的で年相応」な少年、新シリーズでは「受動的で子供らしくない、寡黙な」少年として碇シンジは描かれている。



左　テレビアニメ第壱話　　右　新劇場版「序」
(映像としてはほとんど同じ描写だがセリフは異なっている)

② 絵コンテ分析１　ミサトとシンジ　説教シーンｉ

テレビアニメ第肆話
カット 111～112

「序」カット 881、886(途中部分　略)

これは第五使徒との戦闘時、シンジがミサトの命令を無視し、戦闘を継続したことに対して説教するシーンである。

旧シリーズと新劇では明確な違いは二つある。一つ目は旧シリーズの方ではシンジが『すました顔』『異様にニコヤカ』であると演出意図を見せているのに対し、新シリーズでは『「ひくつ」な笑み』と表しており、二つ目は旧シリーズでは一連のシーンにおいてシンジは顔を出しミサトに面と向かって応答するのに対し、新劇ではシンジはほとんど目をみせることがなく、最後ミサトに胸倉をつかまれる最後のショットにおいてのみその顔を見せるという点である。

これらの演出の効果として挙げられるのは、まず幼稚性の差異である。前述のとおり旧のシンジは「積極的で年相応」、新劇のシンジは「受動的でおとなしい」と論じたが、言い換えると旧ではより幼く新劇ではより大人びた(大人ではない)印象として描かれている。例としてこのシーンの前のセリフで、旧では「ごめんなさい」というのに対し、新劇では「すいません」と言っている。これは私の印象にもよるかもしれないが、旧ではエヴァ搭乗者という自覚が少なく、新劇ではエヴァの搭乗者という役割を認識し、かつミサトに対しての上下関係を把握・自覚したうえで謝罪するため、「すいません」というより大人びた台詞なのだとおもわれる。

画コンテに戻ってみる。説教されている際に『異様にニコヤカ』な顔をするというのは明らかに幼稚な反抗心の現れであり、ミサトへの応答にも強く反抗心のこめて「はい」と発言するなど、反発の意志が強い。旧シリーズのシンジは子供じみながらも強い意志をもって反発しているといえる。一方、新劇でシンジの「乗りますよ」は一種、エヴァに乗ること自体に自傷的なニュアンスも含ませている。それを察したミサトは胸倉を掴み、手を上げようとする。しかし、その理不尽な状況に追い込んでいるのは、ミサト彼女自身であることに間違いない。手を上げることが出来ないミサトがシンジの“母親役”になりきれていないことすら見抜いた碇シンジはこうして、エヴァパイロットの自覚はもっているものの「卑屈」な笑みを見せるのだ。実はこのショット、映像でみると笑みを浮かべているのか分かりにくい。目をミサトから逸らし、伏し目がちに胸倉をつかまれているため、より「諦めた」印象を受けるからだ。意志を放棄しエヴァに搭乗せざるを得ない状況に甘んじているという演出効果を与えている。

このように“二人”の碇シンジを見てきたが、改めて碇シンジというのは果たしてどのような少年なのか。

碇シンジには「親に捨てられた」という強い原体験をもっている。母親は幼い頃に早逝し、父であるゲンドウには目の前で捨てられるなど、親からの愛情を十分に受けて育っていないために自分の願望を抑圧するというよりも願望をもつことを放棄したまま萎縮してしまっている。シンジはわがままを言わないことで「偽りの自己」をもつ「いい子」であり優等生として生きている。しかし、それは一種の防護壁にすぎず、他者との距離がわからず、甘えることもできない。他人はどこまで自分を許容してくれるのかも分からない。作中において赤木リツコはシンジの性格について「自分のぬくもりを伝えたいと思っても身を寄せれば寄せるほど体中の棘で傷つけてしまう～中略～今のシンジ君はその痛みに怯

えて臆病になっているんでしょうね」と語っている。他人に近づきたいが、傷つき合ってしまうので親密になることができない特有の人間関係の困難さを碇シンジは抱えているのだ。

庵野秀明監督は以前インタビュー(1996年)でインタビュアーの「エヴァはシンジ君が大人になる話ですよね、ホントは」という返しに「それは僕が大人になるってことと同じですよね。シンジ君って昔の庵野さんなんですか、って聞かれるんですが、違うんですよ。シンジ君っていまの僕です(笑)。14歳の少年を演じるくらい僕は幼いんです。どうみても精神医学的に言うならオーラルステージ(口唇期)ですよね。メランコリーな口唇依存型。まあ、これは否定しようのない事実で、しかたがないことなんです。そこから前に進もうと思っていたんですが、それは結果として自己への退行になってしまった。袋小路ですね」[4]と述べている。

碇シンジが庵野秀明監督自身の投影であることは間違いなく、旧シリーズにおいてこの「幼稚性」は碇シンジのキャラ造型に強く発揮されたものだと考えられる。旧シリーズでは「ヤマアラシのジレンマ」の克服、つまり「他者との関係性」が物語の焦点となっており、物語のスタート地点で幼稚なシンジを見せることで、より「ヤマアラシのジレンマ」の克服が「幼稚性」の克服、つまりシンジの成長につなげていくことを目的としていたはずである。しかし旧シリーズの完結編である「Air/まごころを君に」では「幼稚性の克服」に失敗することとなる。「他者との関係性」に対しては一定の結論は導き出せたものの碇シンジは成長することができず、子供のまま物語は幕を閉じてしまう。

一方新劇では碇シンジに対して「幼稚性」のかわりに強い「諦観」、「意志薄弱さ」が付与されている。テレビアニメ版においても「意志」をもつことの大切さを説くシーンはあるがシンジ自身の「意志」はほとんど発揮されておらず、「Air/まごころを君に」の劇中でも最後の最後に至るまで「意志」をもつことができていない。

旧シリーズの「前に進もうとしたら結果として自己への退行」になり、シンジが成長を遂げず終わってしまった物語を軌道修正するための大事な要素として碇シンジ自身の「意志」が新劇では着目された。故にあえて露骨に「卑屈」で「諦観」する碇シンジをスタート地点に据える必要があったのだ。

③ 映像分析1　非実体的な心情描写について

ここからは少し趣を変えて旧シリーズと新劇の違いについてアニメ演出全体の技術的な変化を織り交ぜた視点で見ていこうと思う。マンガやアニメは「記号論」として捉えることができる。アニメ記号論とは映画手法におけるモンタージュ論の根本の考え方と相通ずるものがある。つまり、アニメのキャラクターや事物は一種の“言語”であり、手塚治虫が晩年述べたように、我々は多種のパターンを組み合わせてアニメ(漫画)を鑑賞するという

---

[4] 庵野秀明スキゾ・エヴァンゲリオン P.44

ことである[5]。アニメ内の図像を「記号」を認識し、その奥に「本物」を見ているという考え方である。その考えを援用して、3DCG と手絵がきアニメの比較をしてみる。藤津亮太氏はこう述べている。「3DCG はあくまで実体である、という点だ。手描きの図像は『本物』を想起させる手がかりだったが、ピクサーライクな 3DCG キャラクターは『記号性を持ちつつ、本物として目の前に存在している』ものなのだ。だからそこにある『記号性』は『本物』を想起させる手がかりではない。ここに手描きアニメとピクサーライクな3DCGアニメの大きな違いがある」[6]つまり、手描きアニメとは「記号」であり、3DCGアニメとは「実体」に近いため、後者のアニメではギャグやコミカルな描写は描きづらいという指摘である。(『STAND　BY　ME　ドラえもん』への指摘)

エヴァンゲリオンに話を戻そう。テレビアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』は1995年に上映が開始され、その後旧劇場版は97年に上映されたことで旧シリーズは完結を迎えている。新劇場版はその 10 年後、2007 年に上映が開始されている。その間、アニメ制作技術も発達し、新劇場版では CG が多用されている。キャラ描写においてはピクサーライクな3DCG ではないが、前述の言い方にすればより「記号」から「実体」的なアニメに変化している。より動きは滑らかに、陰影は細やかになるなど、写実的なアニメに近づいて行っているといえるだろう。しかし、一長一短のところもある。それはギャグやコミカルな描写、そしてここからは持論だが色彩を用いた強い心理描写もしづらいのだと思う。手書きアニメでは「実体」ではないからこそ、印象派・現代アートが誇るような別の次元でのリアリズムの追及ができるのである。それが旧シリーズにおいては卓越している。

テレビアニメ版第肆話で登場した描写であるものの、新劇場版では省かれた描写を見る。

先ほどのミサトからの説教シーンの後、シンジは家出をする。その後当然のように帰らざるを得ないシンジは第三新東京市にもどる。このショットはそんな中、シンジが家に帰ろうとした時に挟まれる映像である。

朝焼けのビル群の中で、警戒色でありかつエヴァ初号機の色である「紫」に包まれながら、背景のビル群はシンジを巻き込むように動いていく。彼は第三新東京市を守るためにエヴァに乗らなければならないという「恐怖」に改めて気づき、また逃げ出す。旧シリーズではこのような心情描写がメインに据えられ、後半に行くごとにデフォルメされ観念的

---

[5] アトムの命題
[6] アニメの輪郭

な描写が増えていく。それが当時人々の「エヴァンゲリオン」への熱狂に導いた主要因でもある。人物の心情描写を非実体的に描くことのできたパイオニアとしての評価だろう。

新劇では基本的にそれらは省略される。先ほど述べた通り、新劇ではよりリアル描写が増え、デフォルメされた心情描写が似つかわしくなったのだろう。しかし一方で①②に考えをもどすと、こうも言えないだろうか。このシーンが新劇に存在してしまうとエヴァへの恐怖が主題になってしまうからである、と。新シリーズでは「エヴァ搭乗の恐怖」ではなくシンジの「意志」がないことへの指摘を行いためにこのシーンが省かれたのかもしれない。その後、旧シリーズ、新劇ともに碇シンジはミサトに呼び出され、もういちど説教されることになる。

④ セリフ分析２　ミサトとシンジ　説教シーンii

●テレビアニメ版第肆話

シンジ「(一部略)叱らないんですね。家出のこと。当然ですよね。ミサトさんは他人なんですから」

シンジ「もし僕が乗りたくないって言ったら初号機はどうするんですか？」

ミサト「レイが乗るでしょうね」

ミサト「乗らないの」

シンジ「そんなことできるわけないじゃないですか。彼女に全部押し付けるなんて。大丈夫ですよ。乗りますよ」

ミサト「乗りたくないの？」

シンジ「そりゃそうでしょう。第一僕には向いていませんよ、そうゆうの。だけど綾波やミサトさんやリツコさん…」

ミサト「いい加減にしなさいよ！人のことなんか関係ないでしょ！？嫌ならこっからでていきなさい！エヴァや私たちのことは全部忘れて、元の生活に戻りなさい！」

ミサト「あんたみたいな気持ちで乗られんのは迷惑よ」

●「序」

シンジ「(一部略)もう僕には自由なんてないんだ。どうせ僕はエヴァに乗るしかないんですよね？そのためだけに父さんに呼ばれたんだから。いいですよ。乗りますよ。それでみんながいいんだったら、僕はいいですよ」

ミサト「みんなって…あなたはどうなの？」

シンジ「僕にはムリだってこと分かってるんですよ。みんなも分かってるんだ、きっとそれでもケガしてる綾波やミサトさんや、父さんが…」

ミサト「いい加減にしなさい！人のことなんか関係ないでしょう。エヴァのパイロットを続けるかどうか、あなた自身が決めなさい」

このシーンも家出後に理不尽にエヴァに乗らねばならず、不貞腐れているシンジに、ミサトが怒るシーンである。旧シリーズ・新劇どちらも同じ画コンテを用いているが、セリフの内容は大きく異なる。旧シリーズではシンジが明確にエヴァに「乗りたくない」意志を示しており、セリフ中では「エヴァに乗るか、乗らないか」が会話の焦点になっている。旧シリーズにおけるエヴァの搭乗とは、AT フィールドに代表されるように「他者と関わる」ことのメタファーでもある。旧シリーズでは「エヴァに乗る」=「他者と関わっていく」ことなのだ。一方、新劇では「僕に自由なんてないんだ」という台詞やミサトの「あなた自身が決めなさい」という台詞があるように、シンジの「意志薄弱さ」を際立たせるセリフ回しになっている。改めて旧シリーズはシンジの成長を「他者との関わり」によるアプローチで目指していたのに対して、新劇ではそれに対して「意志」をもつことが重視されたのだと考えられる。

II テレビアニメ版と新劇場版：破の比較
～大人への道と意志の発露～

「破」はエヴァンゲリオンのエンターテインメント性において最高峰の作品である。綾波レイに加えて式波・アスカ・ラングレー、真希波・マリ・イラストリアスが登場したことによるヒロイン達と碇シンジのラブコメ要素や、加持リョウジという碇シンジへ別の角度で父性を示す人物の登場、心を開いていく綾波レイ、そして最終的にレイを救わんと必死に使徒と戦う碇シンジ。「破」ではストーリーに絶妙な変更が加えられつつ、テレビアニメ版も踏襲している格好となっている。

さてここの分析では話が飛んで「破」の後半部分、テレビアニメでは第拾九話のシーンを見ていく。碇ゲンドウにより、碇シンジは使徒化したアスカ(テレビアニメ版では鈴原トウジ)が搭乗しているエヴァ三号機との交戦を命令されるも、躊躇う。それを見たゲンドウはダミープラグを用いて、シンジの意志とは離れて初号機に無理やり交戦させエヴァ三号機を残虐に殲滅させる。意志に反して眼前でアスカ(テレビアニメでは鈴原トウジ)を潰させられたことにゲンドウへの怒りが頂点に達した碇シンジは、NERV 本部を壊滅させようと駄々をこねるも失敗・逮捕され、ゲンドウと対峙することになる。

⑤ セリフ分析３　ゲンドウ、シンジ追放シーン

●テレビアニメ版[7]

ゲンドウ「命令違反、エヴァの私的占有、稚拙な恫喝、これらは全て犯罪行為だ」
　　何か言いたいことがあるか」

---

[7] 新世紀エヴァンゲリオン第拾九話　男の戦い

シンジ　「はい、僕はもうエヴァには乗りたくありません。ここにもいたくありません」
ゲンドウ「では出ていけ」
シンジ　「はい、先生のところに帰ります」
ゲンドウ「**また逃げ出すのか。お前には失望した。もう会うこともあるまい**」
シンジ　「**はい、そのつもりです**」

●新劇場版：破
ゲンドウ「命令違反、エヴァの私的占有、稚拙な恫喝、これらは全て犯罪行為だ。
何か言いたいことはあるか」
シンジ　「はい、僕はもうエヴァには乗りたくありません」
ゲンドウ「そうか、ならば出ていけ。
また逃げ出すのか？自分の願望はあらゆる犠牲を払い、自分の力で実現させるものだ。他人から与えられるものではない。シンジ、大人になれ」
シンジ　「**僕には何が大人かわかりません**」

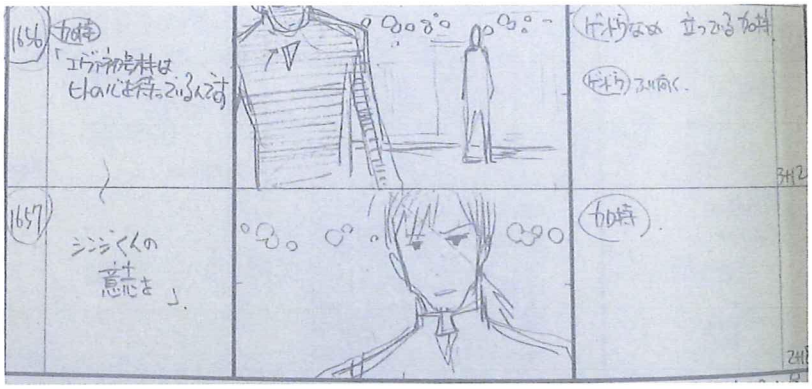
このシーンも画コンテの段階では両者とも全く同じ描かれ方をしていたが、セリフは大幅に書き換わっている。いくつか変更はあるが（「ここにもいたくありません」が省略されたのは「破」でのシンジの環境の肯定的な変化もあるだろう）一番の変化は赤字の部分である。ここが丸ごと追加・変更されたことは特筆に値するだろう。
「自分の願望はあらゆる犠牲を払い、自分の力で実現させるものだ。他人から与えられるものではない」この発想はゲンドウというキャラの根本の精神を貫くもので、この後『シン・エヴァンゲリオン劇場版:||』において、妻である碇ユイに会いたいがために人類補完計画を発動させ、人類滅亡へと追いやろうとする、という危ない発想の一面が露呈している。このセリフはそのあと「大人になれ、シンジ」という言葉につながっているが、上記を考えれば、ゲンドウの「大人」観にも問題はある。シンジはこれに「大人が何かわかりません」と答える。意志を持てていないシンジが大人になれないという不可能性を表現するセリフなのか、それとも意志をもつことが大人になることとイコールではないという否定性を表現するセリフなのか？ここに実は「意志をもつことだけで大人になれるわけではない」という伏線が見え隠れしている。意志薄弱なシンジが他人からの施しではなく自らの意志・選択によって道を開くことで大人になろうとする、どちらにせよこれをゲンドウは祈っていた。シンジはエヴァ参号機との戦いの際、自分の意志で倒すのか、逃げるのか決めることが出来ず、ゲンドウの力で殲滅するという形になってしまった。ここでもやはり「意志」が一大テーマとなっていることが分かるだろう。

⑥ 画コンテ分析２　削られた画コンテ

先ほども述べたが、画コンテと映像は一致しないことがいくつかある。内容として本筋を欠いていたり、キャラ造型に問題をきたすからなど理由は様々だろうが、ここでは「破」において省かれた二つの画コンテについて見ていきたい。(勿論テレビアニメ版にも存在しない)

上のシーンはシンジが追放されたのちにまたしても使徒が接近し、シンジは隠れていたものの、マリに助けだされ、甚大な被害を受けた第三新東京市の光景をみる。そして綾波レイの登場するエヴァ零号機が使徒によって捕食される光景を見た結果、自分の意志で初号機に搭乗することを決意し、走り出す直前のシーンだ。

下のシーンはそのシンジが初号機に乗る寸前、ゲンドウが初号機起動を図っているシーンである。



「破」ではその後、シンジは強い**意志**をもって綾波を助けるために戦闘を行う。エヴァ全体においても一番の見せ場であり、シンジが放った「綾波を返せ！！！」のシーンはその集大成となっている。しかし、**意志**を持ち行動したからといってうまくいくわけではない。むしろ最悪な事態を遍くことすらあるのだ。意志だけでは足りないのだ。物語は新劇場版：Ｑにつながっていく。

Ⅲ　新劇場版：Q の演出

～意志が全てを破壊したとき　贖罪の方法について～

舞台は 14 年後に移る。碇シンジの決死の行動はニアサードインパクトを引き起こし、人類全体を災厄に陥れるサードインパクトのトリガーとなった。人類は滅亡の淵に立たされ、大地と海ははコア化し真っ赤に染められている。そんな中、碇シンジは 14 年ぶりに意識を回復し、物語は再び始まる。

この「Q」の作品全体の秀逸なところは、碇シンジ同様に観客自身もメタ的に「何が起きているのか、さっぱりわからない」ことが体験できることである。もともと難解なエヴァの世界観設定に、膨大な量の未知な情報が連続で登場し 14 年後という唐突な設定とともに混乱をきたすことになる。登場キャラも 14 年を経て内面的にも外見的にも変わってしまっていた。

しかしアスカやシンジ、アヤナミレイ(仮称)は外見がそのままである。彼らはエヴァの呪縛にかかり、「子供」であるよう囚われているのだ。碇シンジは「エヴァに乗ります」と息巻く。しかしミサトに「碇シンジ君、あなたはもう何もしないで」と言われ、エヴァに乗れば爆発する首輪 DSS チョーカーはめさせられ、その存在をまるごと否定される。

エヴァは「**主人公が何度も同じ目に遭いながら、ひたすら立ち上がっていく話**」である。再び彼は存在を否定されることからリスタートすることになるのだ。「Q」は**贖罪**の方法をめぐる混乱・孤独・絶望の物語である。愛する者のために意志をもって起こした行動が、他者を傷つけることもある。「序」「破」ではシンジの「意志」が問題とされていた。しかしここからは「贖罪」がポイントになっていく。彼はどう贖罪を行うのか、そして大人になるとはどういうことなのだろうか。

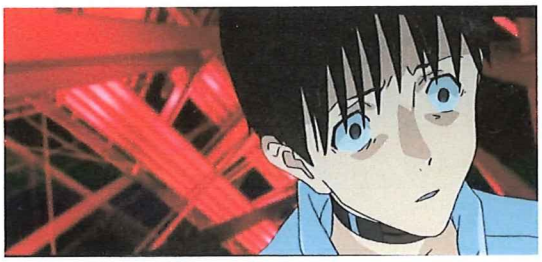
「Q」で描かれるシンジの孤独は、心の交流ができる他者がいないことによるものである。「序」や「破」そしてテレビアニメ版のディスコミュニケーションとは実質的に異なるものだ。なぜなら、この時シンジはむしろ交流を図ろうとしているのだ。ミサトへのエヴァ搭乗の進言、アヤナミレイ(仮称)との交流や渚カヲルとの交流を積極的に目指しており、「ヤマアラシのジレンマ」を抱えていたシンジとはもはや変わっている。

しかし彼は世界を滅亡させ、綾波レイすら救えていなかったことに改めて絶望を抱えることになる。それがはっきりと判明したシーンをみていく。

⑦ 映像分析 2　「絶望」の形成過程

個人的にこのシーンはとても興味深い。シリーズ内で最も絶望しショックを受けるシーンであり、前述の通り新劇場版シリーズでは手描きアニメと異なり CG の多用により「非実体的な」心情描写は難しいものだがここではしっかりと成功している。その成功した要因は、シーン内の要素ごとの定量的変化を伴った秩序だった心情描写だ。ここでは絶望の演出が、シンジの身体と背景について「動き」・「色彩」そして「音」の定量的な変化で演出されているのだ。

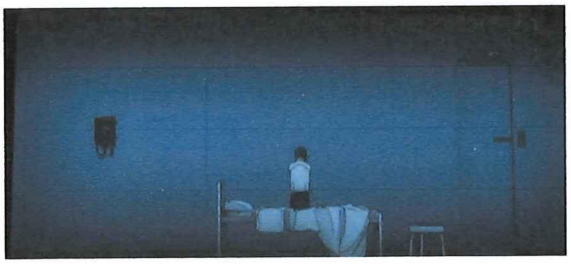
第１ショット



第２ショット

第３ショット

第４ショット



第５ショット

第６ショット

第１ショットでは、現実との延長線にある。白い橋のようなものを歩きながら、シンジは「何も助けてなかった」とつぶやく。次第に動きがぶれ始め、背景全体も大きくぶれ始める。シンジを罵倒するセリフが聞こえ始める。

第２ショットでは、背景が警戒色の赤に染まり、かつシンジの立ち位置とズレて回転を始める。

第３ショットでは、シンジと背景が大きさも含め完全に乖離する。

第４ショットでは、もはやシンジの上下も逆転してしまう。そしてシンジのドアップになり、瞳が映る。

第５ショットで、突然現実にもどる。音も環境音にもどり、シンジは一人ポツンと座っている。

第６ショットで、シンジは「うわあああああ」というむなしい叫びとともに、音楽プレーヤーを投げつける。

特に興味深いのは１〜４と定量的な絶望の形成過程が示されたあとの第５ショットだ。絶望から、現実に戻る。しかし現実に戻ってみてもシンジは罪から逃れることはできない。「何してんだ、僕は…」というセリフとともに自らが「孤独」にならなければならない理由に気づき、現状の回復が不可能だと確信し、第 6 ショットでは全てを投げ出すように「うわあああああ」と音楽プレーヤーを投げつけるのだ。このシーンでは「絶望」そのものが強いリアリティを持って描かれている。絶望を感じ、振り払うように鬱々とする。しかしそれが落ち着いても罪は消えず、問題は解決せず、また絶望が繰り返される。繰り返される自責の念や嫌悪感のなかで、心は壊れてしまうのだ。

そんなシンジには渚カヲルという少年がいた。“つくられた”孤独の中でシンジが唯一交流した人物だ。シンジは彼にエヴァに乗り、世界を修復することを提案される。カヲルは「いまの君に必要なのは何よりも希望。そして贖罪と心の余裕だからね」とシンジに語る。「やり直せる」と知ったシンジは若干の笑顔を取り戻す。しかし、それは世界をもとに戻

そうとする試みであって、惨憺たる世界と直面し、真摯に罪と向き合うことではない。これは真の「**贖罪**」ではないのだ。故に失敗する。カヲルやアスカの静止にもかかわらず、シンジは二本の槍を抜きフォース・インパクトという新たな大災厄のトリガーを引く。結果的に免れるもののDSSチョーカーを引き継いだ渚カヲルはシンジの眼前で爆死する。支えを失ったシンジは「学習性無力感」[8]と呼ばれる状態になる。これは旧劇場版と全く同じ状況である。何もかもできなくなった彼はアスカに立たされ、アヤナミレイ(仮称)とともに旅に出る。シンジがいかに立ち直り、果たして大人になることはできるのか？物語は最終章「シン・エヴァンゲリオン劇場版:||」に続いていく。

Ⅳ「シン・エヴァンゲリオン劇場版:||」「新世紀エヴァンゲリオン　Air/まごころを君に」
～「孤独」だったシンジはどこへ行くのか～

アスカ、シンジ、アヤナミレイ(仮称)の旅は第三村へと続いていた。そこは木造建築と田園風景が広がるほのぼのとした村で、昔仲良しだった同級生たちと14年を経て再会することになる。エヴァとは思えない平和な光景の中でもシンジの「孤独」は終わらない。彼は一切喋ることもなく、ひたすら膝を抱えている。しかし、ここでの「孤独」はQでの「孤独」とは質的に異なる。そう、以前の逆に内面的な孤独にもどってしまった。しかしこれは他人への恐怖によるではなく、罪悪感とカヲルを失った嘆きからくるものである。第三村の人々は温かく出迎える中でも、シンジはひたすらに喋らない。傷ついた世界が元に戻ることことはなく、シンジが引きこもる間にも時は流れ、命の営みはつながっていく。

⑧ 映像分析3　　第三村　宴シーン

手前はシンジが膝を組んで座っている。そしてその奥には新たに「生きること」を学ぼうとしているアヤナミレイ(仮称)と、シンジの同級生だった鈴原トウジと洞木ヒカリ、そして二人の赤ちゃんの4人が戯れている。シンジの手前には絶望が横たわっているが、膝の間のその先には「生きようとする意志や希望」が広がっている。

---

[8] シン・エヴァンゲリオン論

「シン・エヴァンゲリオン」に対して、ここからは「新世紀エヴァンゲリオン　Air/まごころを君に」(以降 EOE)と比較を行う。碇シンジはこちらの結末でも「学習性無力感」に襲われている。EOE では人類を救うために渚カヲルを殺害したことへの罪悪感から抜け出せず、心が壊れていた。NERV が強襲される非常時の中、シンジはミサトに引きずりだされエヴァに乗るように強要される。旧シリーズでは物語の最初から最後まで、他者との関わりである「エヴァに乗る」ことの問答が繰り返されている。道中、ミサトは銃で撃たれ死亡する。ミサトの最期の言葉とキスを受け取っても、シンジは動けない。アスカの悲鳴が聞こえる中でも動けない彼は初号機(碇ユイ)の起動によりようやくエヴァに乗るも残虐に屠られた二号機とアスカの姿を見て発狂。人類補完計画が始まる。意志もなく、自己卑下しかできない碇シンジはアスカに「僕に優しくしてよ」「僕を助けて」「君を救いたいんだ」と言うことしか出来ない。これが彼なりの他者との関わり方としての限界だったのだ。[9]結果としてシンジは「他人と自分が同一な世界」を体験する中で「他人と関わる」ことができる世界を望む。しかし、EOE のラストシーンにおいて、シンジは他者との関わり方が分からないまま放り出される。結局、シンジは成長できずに終わる。物語は、大人になれなかったシンジへの嫌悪感とともに終焉を迎える。

『シン・エヴァンゲリオン』では「学習性無力感」に陥った碇シンジに対しての周りのアプローチが 2 つの点から異なっている。まず 1 つは「時間」である。相田ケンスケという元同級生がこう語る。
「今は放っておこう。碇にはそういう時間が必要だよ」
「心配のしすぎは互いに良くない。信じて待とう」
EOE においてミサトがシンジを引っ張り上げ、むりやり立ち直るのを急かしていたこととは異なり、第三村の皆はシンジに対してあえて長期間ひとりでいる時間を与えたのだ。
そして 2 つ目が「適度な距離感」である。ひとりにしておいたものの、皆はシンジを放っておくことはしなかった。第三村での宴もそうだが、「ひとり」のシンジにアヤナミレイ(仮称)は食料を届けに度々訪れ、アスカも監視(心配)しに彼のもとを訪れるなど適度な距離感を保っていた。シンジは「ひとり」だが決して「孤独」ではなかった。

この第三村のシークエンスは、おそらく庵野監督自身の鬱からの立ち直りとも重ねられている。庵野秀明監督は新劇場版：Q の公開後、鬱状態になってしまう。シン・エヴァンゲリオンまでに 10 年以上の月日が経過したのはそれが理由であったが、庵野監督はゆっくりした時間の中で回復に向かい、周りの人々が良い距離感を守ったおかげで彼の鬱は解消されていったのだろう。

映画冒頭から一切話さなかったシンジは、アヤナミレイ(仮称)との問答の中で、「もう誰も来ないでよ。僕なんか…放っておいてほしいのに。なんでみんなこんな優しいんだよ」

---

[9] エヴァンゲリオンの深層心理

と泣き叫ぶも、アヤナミレイ(仮称)の言葉に絆される。EOE の「みんな、僕に優しくしてよ」とは対照的である。旧シリーズで「他者との関わり」を理解できたシンジはその後、積極的に第三村での生活を営むようになっていく。その後、アヤナミレイ(仮称)の死をきっかけに、自らの「意志」でシンジは AAA ヴンダーに乗り、父である碇ゲンドウと対峙し、ゲンドウや、カヲル、アスカ、レイを救済する。そこで彼は時間も世界も戻せないものの、“エヴァに乗らなくてもいい世界”に書き換えることで、「贖罪」を果たす。

ラストシーン、シンジからはいつの間にか 14 歳だった頃の面影は消え、大人になっている。山口県宇部新川駅を背景に、シンジが現実に飛び込む姿とともに物語は終劇を迎える。

結論

旧シリーズ・新劇場版で共通したことは、シンジが「いかにして大人になれるか」という問題だった。旧シリーズでは「他者との関わり」によるアプローチを試みたが、結局シンジは大人になれなかった。その理由は最後までシンジ自身の「意志」が欠如していたことによるものだった。自らの意志でエヴァに搭乗することが最後までできず、物語は終わることになる。続く新劇場版でも主題は「いかに成長するか」にあったものの、アプローチは異なり、シンジの「意志」が重視されるようになった。しかし、「意志」だけでは足りない。こちらのシンジは「破」において旧シリーズ含めて初めて「意志」をもってエヴァに搭乗することができたものの、そこからはシンジの「贖罪」が描かれていくこととなる。シン・エヴァンゲリオンで「なんでみんなこんな優しいんだよ」と叫ぶシンジは、既に旧シリーズで「他者との関わり」に悩んでいたシンジとは異なっている。第三村での優しい日々の中で、徐々に他者とともに生きることを学ぶ中で、彼は自らの「意志」をもち、「贖罪」をはかろうとしていく。そうした中で彼は成長していき、ようやく大人になることができたのだ。

シンジ同様に、我々も皆「孤独」を抱え、曖昧な他人に怯えながらも「意志」を持ち、ときには他人を傷つけ「贖罪」を果たせねばならないこともある。そうして子供から大人になっていく。「エヴァンゲリオン」という物語は、そんな我々の道しるべとして、これからも永遠につながっていくことであろう。

参考文献・出典・引用

『エヴァンゲリヲン新劇場版：序　画コンテ集』(2017)株式会社カラー
『エヴァンゲリヲン新劇場版：破　画コンテ集』(2017)株式会社カラー
『エヴァンゲリヲン新劇場版：Q　画コンテ集』(2017)株式会社カラー
『新世紀エヴァンゲリオン　画コンテ集　上巻』(2021) 株式会社カラー
『新世紀エヴァンゲリオン　画コンテ集　中巻』(2021) 株式会社カラー
『新世紀エヴァンゲリオン　画コンテ集　下巻』(2021) 株式会社カラー

『新世紀エヴァンゲリオン劇場版　画コンテ集』(2021) 株式会社カラー

竹熊健太郎『庵野秀明スキゾ・エヴァンゲリオン』(1997)太田出版
竹熊健太郎『庵野秀明パラノ・エヴァンゲリオン』(1997)太田出版
阿世賀浩一郎『エヴァンゲリオンの深層心理「自己」という迷宮』(2018)幻冬舎
小野俊太郎『エヴァンゲリオンの精神史』(2022)小鳥遊書房
藤田直哉『シン・エヴァンゲリオン論』河出書房新社(2021)
藤津亮太『アニメの輪郭　主題・作家・手法をめぐって』(2021)青土社
大塚英志『アトムの命題　手塚治虫と戦後まんがの主題』(2009)角川書店
池田宏　小出正志　横田正夫『アニメーションの事典』(2012)朝倉書店
「みんなのエヴァファン」https://eva-fan.com/blog-entry-26.html